結城紬応用創作図案の試作研究

繊維工業指導所

図案部 渡辺 豊 堀井 暉栄

1. 緒言

消費需要の多様化、個性化により、伝統的な結城紬の分野にも近代的感覚の新しいデザインが要求されている。そのため、本年度は東京、京都、大阪方面の各消費市場におけるデザインの動向調査を行いその調査結果を分析して、新しい需要層拡大のため、調査に基づいたデザインの試作・研究を行った。また、調査結果については次季向き製品づくりのためのデザイン情報として業界へ発表して指導した。

2. 内容

2.1 市場におけるデザイン動向

結城紬に対する消費者の趣向は、30代から60代までと幅広いが、40代から50代が中心となっている。柄行きは、古典的模様で正倉院、華文、山水、風景、幾何調と多様である。

構成的には、全体に模様がびっしり詰った複雑なものより、あっさりした構成のもの。また、新しい感覚のデザインとして、従来の亀甲、十字のなかに新しい縞を組み合わせた変化のある模様が望まれている。

色彩的には、(配色)同系色濃淡調の単彩なものと、多色使いでも単彩調に見える配色のものが好まれている。全体的に単彩調のものでクールな感覚を強調しているのが特徴である。

2.2 デザイン試作

市場動向調査の結果を参考として、若年層から年配層を含めた広範囲を念頭においた構図を考案し、文様の展開を次のように行った。

- (1) 正倉院文様の双鳥と唐花を単純化し、結城紬に向くよう構成した。配色は、模様との調和を考慮し、柔らかい感じに表現した。
- (2) 3色の紙テープを、経・横・斜めに交差させた大胆な構成のなかに古典的な幾何文様を配置し、若向きのデザインに表現した。
- (3) 有栖川錦の鹿とつばたれを結城紬に向くよう構成し、模様を亀甲の地抜きで表現した。配色は、落ち着きをもたせるため同系色濃淡使いとした。
- (4) 古典模様の麻の葉、七宝つなぎ、松皮菱、貝桶など数種の素材を組み合わせ、斜方形に構成した。配色は、彩度の低い多色を用い単彩調に見えるよう表現した。
- (5) 氷割、蜀江、亀甲文を単純化して縞調に配列した。配色は、全体に渋くして落ち着きをもたせ気品のあるデザインに表現した。
- (6) 高級品をねらいに、有栖川錦と幾何調の割り付け文様を松皮くずしのなかに展開構成し、全面に

模様を配列した。配色は、単彩調で年配向きに表現した。

- (7) 紗綾形、亀甲文、七宝つなぎ、立涌など幾何調の文様を併用させ、空間を生かしすっきりした感じに表現した。
- (8) グラデーションによる市松のなかに菊、松、網の目の文様を階段的に配列した。配色は結城紬の用途に合った美しさを表現した。
- (9) 地抜き模様の唐草のなかに御所解風の模様を散点調に配置した。配色は、単彩調ですっきりした感じに表現した。
- (10) 山水調の模様を結城紬向きにデザイン化し、配色による遠近法を用いて立体感を表現した。

2.3 結果

今年度試作したデザインは、動向調査に基づいた古典模様および配色を主体に試作研究を行った結果、デザインの構成面では、平行移動、上下移動、反転移動によるパターンの展開構成を行うことにより、変化のあるデザインを作成することができた。また、配色については、色調の変化を主体に考えた組み合わせと、明度に主体に考えた組み合わせによる配色調和を行ったため、従来に替る新しい感覚の配色を得ることができた。

2.4 試作デザインの発表

試作したデザイン42点は、60年10月29日(火)と61年3月28日(金)の2回、結城紬卸商協同組合員を対象に作品の展示発表を行い、業界へ希望配布し、新柄意欲の向上と付加価値向上の一助とした。

3. 結言

結城紬織物としては、素朴さのなかに渋さと落ちつきと上品さをそなえた格調高いものということで、色や柄をすっきり表現することが望まれる。また、高価な製品であるから近代的感覚のデザインのなかでも、産地の特性を備えたものであることも要求される。

このような産地の特性の中で、結城紬のデザイン向上を図るうえでの、開発の目的と対象を具体的に、かつ、明確にして、デザインの創作を行い、業界指導を実施し、消費需要の多様化と個性化に対応した。